第九回

名誉の精神こそ一五〇年の転換の要諦

西郷隆盛を彷彿とさせる勝元盛次が主役の一人である映画『ザ・ラスト・サムライ』は雲海の一部に島々の頂上が浮上する佐世保沖の九十九島を背景に「日本は一握りの勇者によって創造されたといわれる／彼等が生命をかけてまもったものは／現在では忘れされつつある言葉・名誉」という荘厳な言葉で開幕する。

背景の映像と日本の創造という言葉はイザナギとイザナミの国産みの故事を連想させるが、映画の内容からは明治維新によって近代日本が誕生した歴史を表現した言葉だと理解できる。

トム・クルーズの役割はフランスの軍事顧問として箱館戦争で榎本武揚指揮の旧幕府軍を支援したジュール・ブリュネを下敷きにしている。

これ以外にも、明治維新の背景に名誉の意識が存在したことを証明する故事がある。

幕末に密航して西欧社会を実見した人々は彼我の格差を痛感し、明治になって次々と政策を推進する。その一例が明治三年の伊藤博文と山尾庸三による「工部学校建設の建議」であり、その学校の初代校長として明治六年に弱冠二五歳で来日したのがヘンリー・ダイアーであった。ダイアーは当時の技術分野では世界最高のグラスゴー大学を首席で卒業したばかりの逸材で、恩師の命令とはいえ、東洋の島国に派遣されることは本意ではなかったかもしれない。

しかし、入学してきた若者の意欲と能力に感動し、五年の契約を延長して足掛け一〇年間も滞在して帰国する。

帰国したダイアーは日本を分析する大部の書物『大日本・東洋のイギリス』（一九〇四）を出版するが、そこで探求したのは日本の若者が異常な情熱で勉強する理由であった。その検討の過程で出会った回答が新渡戸稲造の英文で出版した『武士道』（一九〇〇）で、その一節を引用している。

「日本が必死で明治維新を推進しているのは物質資源の開発や国富の増進が動機ではない／ましてや西洋の習慣の闇雲な模倣の追求でもない／なによりも劣等国として見下されていることに我慢できない名誉を重視する気持ちこそが最大の動機である」

江戸幕府が裁判権も関税権も自国にない安政不平等条約を五カ国と締結した不名誉を帳消しにすることである。

昨今の国内の政治や行政で露呈する醜聞、国際問題での日本の弱腰など、残念な事態が頻発している。事情は多様であるにせよ、ウルグアイのホセ・ムヒカ前大統領の「かつての日本人は名誉を重んじる民族であったが、現在の日本人はその精神を喪失している」という言葉が原因を要約している。

二一世紀になって日本は人口の減少だけではなく、経済でも技術でも急速に地位が低下している。その転換のためには明治の人々が名誉の回復のため必死に努力をした精神が必要である。

明治維新一五〇年の時期に連載の機会をいただいたことへの御礼とともに、鹿児島県の皆様が日本再興のために明治の祖先の精神を再現していただくことを期待する。

Profile

東京大学名誉教授

月尾 嘉男 氏

1942年愛知県生まれ
1965年東京大学卒業。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て、現在は東京大学名誉教授

発行日／平成31年3月29日発行通巻45号　発行者／公益社団法人鹿児島県特産品協会
〒892-0821 鹿児島市名山町9番1号 鹿児島県産業会館内 TEL.099-223-9177 FAX.099-227-0768 http://www.k-p-a.jp